

## ルネ1世・善王(1409～1480年)

### 王

1434年、アンジュー家の末子ルネ1世は兄の死去に伴いナポリおよびシチリア王、アンジュー伯、プロヴァンス伯の地位を相続しました。また二度の婚姻によりパール公、ロレーヌ公、メヌ伯の地位も手に入れました。しかしロレーヌ公国をめぐるブルゴーニュ公との戦いに敗れた後、6年間にわたる捕虜生活を強いられ、1437年には高額な代償を支払っています。

さらにその後もアラゴン王国のアルフォンス5世に敗れナポリ王国を失なったものの、娘マルグリートを通じフランス国王シャルル7世とは義兄弟、またイングランド王ヘンリー6世の義父という地位に留まっていた。

### 芸術の庇護者

闘いに破れたルネ1世は1447年にアンジェを離れプロヴァンスに隠遁し、芸術や自らの喜びを享受することに専念しました。芸術家や知識人たちに囲まれながら詩や「愛に燃える心」などの宮廷小説も創作し、写本には当時の画家たちにより装飾が施されました。また1449年には騎士トーナメント、そして1474年にはタラスク※の祭典なども開催しています。その際には華麗な雰囲気演出するため6人ほどの聖歌隊も雇われました。1480年にその生涯を閉じると、彼の伯爵領は相続されないままに病弱の甥シャルル・デュ・メヌに受け継がれます。これにより1481年、フランス王ルイ11世によるプロヴァンス地方のフランス王国への併合を容易にさせました。

### 用語解説

**聖歌隊**：宗教的な式典で歌ったり典礼聖歌を指揮することもあった。

**持ち出し**：突き出し部に造られた石製の張り出し。

**根太間**：梁の間にある垂直のパネル

**マシクーリ**：城壁の上部にある石の歩廊で、床面に石や矢を放つための開口部がある。

**タラスク**：龍、魚、馬の姿をした伝説の両生動物。ローヌ河岸の洞窟に生息すると言われている。タラスコンの地名はタラスクをその由来としている。

### 実用インフォメーション

見学に要する時間：約1時間15分

Centre des monuments nationaux (国立モニュメントセンター)では、フランスの各種モニュメントを紹介するガイド(数ヶ国語に翻訳されています)を刊行しています。「Éditions du patrimoine(国家遺産シリーズ)」も書店・ブティックでお求めいただけます。

Centre des monuments nationaux  
Château de Tarascon  
13150 Tarascon  
tél. 04 90 91 01 93  
fax 04 90 91 02 76

[www.monum.fr](http://www.monum.fr)

## タラスコン城

### ルネ王の城

#### 王室の守護者



ローヌ河からの眺め

843年にシャルルマーニュ帝国が分割された当時、ローヌ河は政治的境界となり、タラスコンおよび岩場の多い河沿いの小島は軍事、政治の両面にわたる最も重要な戦略拠点と化していました。

1400年、アンジュー公・プロヴァンス伯のルイ2世により城の建造が始まりました。その後はルイ3世やルネ1世といった彼の息子たちにより建造が引き継がれ、特にルネ1世は城の整備と内装に力を注ぎ、ルネッサンス様式の宮殿に仕上げました。

1481年、プロヴァンス地方がフランス王国に併合されて以来この城は要人の宿泊に使用されるようになり、また後には硬貨製造所、18世紀には軍用の監獄、そして1816年から1926年までは拘留所として使用され、1932年より国の所有となっています。

#### 建築的なコントラスト

要塞であると同時にルネッサンス様式の宮殿としての姿も見せるこの城は、領主の居住棟と側庭にはっきり分かれています。領主の居住棟は前庭を中心として形成され、らせん階段や光を取り入れるための大きな窓など、来賓へのもてなしを考慮した配慮がなされています。イタリアの影響を伺わせる彫刻装飾は、ルネ1世の洗練された感性と頻りに催された祭典を物語っています。

## 城

城へは橋をわたっていきます。現代の創作品を展示するため、城の内部は調度品等がすべて取り除かれています。

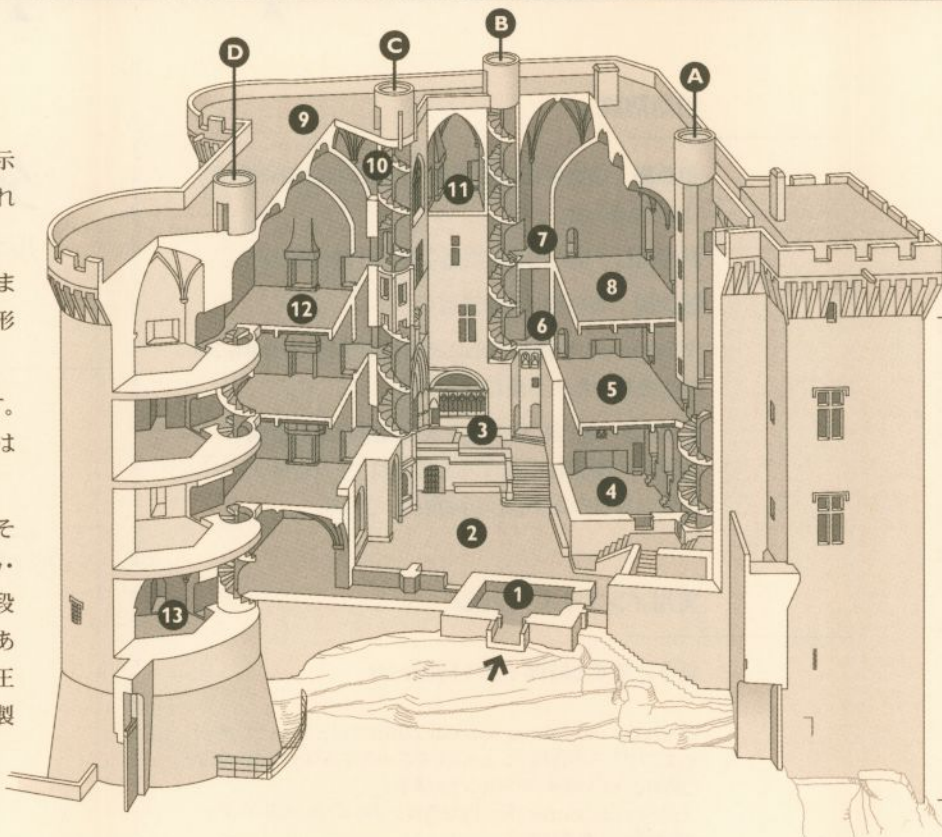
- 1 **主塔・入口**には城門を閉鎖するための落とし格子、また敵の勢力を鎮圧させるため防御孔を備えたL字形の幅の狭い経路が配備されています。
- 2 **前庭**の周囲には王侯のアバルトマンが連なっています。大礼拝堂に面した四角形の窓を通し、使用人たちは歩廊でミサを聞くことができました。
- 3 **聖歌隊※礼拝堂**と大礼拝堂へ行くには、ルネ王とその



の第二番目の夫人ジャンヌ・ドゥ・ラヴァルの半身像の下から階段を進みます。大礼拝堂の西側にある壁の上部には、かつて王が王妃の寝室へ行く際に渡った木製の歩廊が当時のままに保存されています。西翼を見学するには前庭へ戻ります。

## ローヌ河を望む王翼

- 4 **祝宴の間**には大きな二つの暖炉と五つの窓が配置され、明かりと熱を取り入れるための配慮がなされています。北側には排水溝、また南側には廃棄物を河へ直接落とすための落とし戸があり、機能的な役割を果たしていました。上階の部屋へ行くには階段**A**をのぼります。
- 5 **式典の間**(二階)には幻想的な動物画が豊かに描かれた根太間の天井が保存されています。この間はレセプションに使用されていた他、私的な食事の場でもありました。
- 6 **王の寝室**には安全が配慮され窓が二つしかありません。暖炉と便所が備えられた快適な空間となっています。三階へ行くには階段**B**を上がります。



- 7 **大応接間**は顧問たちのくつろぎの場であったと言われています。便所は河を見下ろすように持ち出し※による張り出しの上に作られています。
- 8 **広大な衣装部屋**には貴重品、タピスリー、衣服、本箱、馬具、鎧などが収納されていました。ここから順路を逆に戻り、階段**B**からテラスへ出ます。
- 9 **テラス**の高度は48メートルにもおよんでいますが、これは軍事的な理由からで、欄干にはマシクーリ※や銃眼が備わっています。階段**C**を降ります。
- 10 **最上階の礼拝堂**は王および王妃、その従者専用の場でした。オラトリイ(祈祷所)に開けられた小さな開口部は換気および音響効果を高める機能を果たしていました。

- 11 通称「**宝石の部屋**」から礼拝堂付きの司祭が、かまどのホスチア(ミサで拝領する聖体のパン)の焼き加減を見守っていたと言われています。隣接した部屋は通称「**要塞の部屋**」と呼ばれていました。

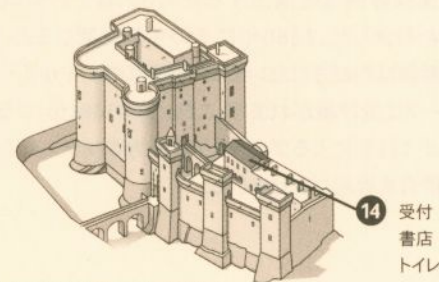
## 都市を一望する王妃翼

- 12 **寝室**の天井には幻想的な動物や人物のフリーズ装飾が保存されています。各寝室を四階まで見学した後、階段**D**から「貴婦人マルグリット」の部屋、そして六角形の部屋へと降ります。その後は階段**C**から二階にある王の部屋、ピエール・ボーヴォの部屋、そして王妃たちの部屋へ行きます。そこから順路を逆に戻り、階段**D**を降ります。
- 13 **ガレー船の間**は、壁いっぱいに描かれた船のグラフィティをその名の由来としています。ここから前庭の歩廊下を通して外に出ます。

## 家禽飼育場

ここは城の使用人や守備隊により使用されていました。都市側の部分は縦長の三つの塔に防御された第一の城壁に保護されていました。

- 14 **付属棟**には厨房および食品貯蔵室がありました。広場には、中央に池を配した中世風の庭園があります。



※用語解説は裏面にあります